



岷江入楚

藤裏葉

才三

特別
~ 12
4604
32



47
12
4604
32

5.



麻裏葉

北九歲

秋去上天皇尊号

小汀文庫

八月廿日宰相中納言 雲井房給事

三月廿日大宮水忌日由大臣殿系松末寺夕音回奉

内大臣殿引宰相中納言御儀引給事

正月一日此者在感内大臣引中納言為山使招宰相
中納言

源氏志下賜所直衣書宰相中納言

宰相中納言内大臣才了

内大臣地務 以中納言折友花加容人孟平

并少納言等 以中納言引導宰相中將令見

系世云并后事

宰相中納言是後知又書女下事

源氏又書刑宰相中納言事

八日灌佛事

紫上詣賀茂佛 承後事

しそはあまの

中務夕音よやうしそはあまの

右大臣中務夕音よやうしそはあまの

私に夕音よやうしそはあまの

定むるはあまのしそはあまの

又しそはあまの

雲井屋よお人をむしそはあまの

人のあまのしそはあまの

又しそはあまの

しそはあまの

又由大臣の原りま方かとしそはあまの

志のよしとれとしそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

由大臣

私に夕音よやうしそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

しそはあまの

給有一筆彈之人其指入作此件此非巧匠之所及自
手のあたりに於之宝物也天皇帝令隨身給自若何還佛し回思
念立極樂寺給也

令起立本立心中被願念云此礼不末獻者今生之責恨
也三三可加謹念念求得之處必可建立一伽藍也願り不空
末末獻之天皇殊以感歎群臣之中抽被仰被印童之
條定有被思食趣歎其後昭宣公極昇進為果他皆願
念立極樂寺給也

九條右丞相記云此度落慶寺と經一町東寺西寺天台
唐院極樂寺法性寺興福寺

李王記兼平二年三月廿七日皇太后於極樂寺為先考
太政大臣及先妣王氏人康親女追福修法舍今案極樂寺暨
公建立し極深幸

蘭卷三三系大文此三月四月とあり誤ありとあり
大文の小事月蘭卷三月と見え三月とあり
三月は除服の日は三月とあり三月のいふは

月此服七月まよあつたれ此蘭云云大文此日三月
之前卷は卯月と勘らる誤之除服近日も今案極服
何ヶ月とよみ六月日教とあり然令三月廿七日
ら五ヶ月とあり服百廿日とあり八月廿九日百廿
日とあり一當時も亦用はけとあり此日教は
極服わく之重服その忌月しり忌日とあり此日教
中も用はけ文分有也今十三日と除服百廿日
しりをもしりしりけり除服百廿日とあり又誤を
よつてけ教しりもわたり除服近日の事もわは
るは遠れぬは極服令服極多と服年謂以十
二月為限不計因月其上月の下の並計計日
はあはるは極服の忌日とあり此日教は
三月は所は三月とあり三月とあり
若し三月は三月とあり三月とあり
四月の類は三月とあり三月とあり
宰相中わたり三月とあり三月とあり

舟は手振るるるのす

或は流し先より使してゆたはの詞

わづらの木の葉をたをねふらぬわづらぬ春のりそり

かたつねはとゆりしとぬみ

私を先き重井屋をすをわのめす也也春も其心

いとおとまりの春

春しかりられたるこころを私をあら詞のたを

しらつねはとゆりしとぬみ

りつねはとゆりしとぬみ

重井屋の父の言よりりつねはとゆりしとぬみ

はあまよふとゆりしとぬみ

莫く大極
中上
妙を元
仲
原し中
三言及るめ
二言及るめ
物イフハ深極
せなる

莫く大極やなみ流り 又一勅をりつねはとゆりし

いさこの葉しとゆりしとぬみ

私説もたよりたを文を成ては面白しとゆりし

ゆりしとぬみ

五女家よりりしとぬみ

上りしとぬみ

ゆりしとぬみ

私云春よ来ゆりしとぬみ

とゆりしとぬみ

とゆりしとぬみ

とゆりしとぬみ

とゆりしとぬみ

とゆりしとぬみ

うらりふといづんいづん

夕音の詞

井ノ末の詞

相木の由緒もといふはわり音れたりよなまおれり

おと娘おと娘よ 舞休成のあましく

おしやわたりてゆーぬるま

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

おと娘おと娘よ

源の詞

たまに人よとくしきく ヤウキヤウキ
おとけりし いふはらり

由ら居居席たし いふはらり
おつし いふはらり

由ら居居 世帯末 いふはらり

由ら居居 女居席 いふはらり
由ら居居 女居席 いふはらり

由ら居居 女居席 いふはらり
由ら居居 女居席 いふはらり

由ら居居 女居席 いふはらり
由ら居居 女居席 いふはらり

由ら居居 女居席 いふはらり
由ら居居 女居席 いふはらり

由ら居居 女居席 いふはらり
由ら居居 女居席 いふはらり

あらはれし いふはらり

ウキ音の傳門 いふはらり
いし いふはらり

おつし いふはらり
おつし いふはらり

おつし いふはらり
おつし いふはらり

おつし いふはらり
おつし いふはらり

おつし いふはらり
おつし いふはらり

おつし いふはらり
おつし いふはらり

おつし いふはらり
おつし いふはらり

おつし いふはらり
おつし いふはらり

先 いふはらり
先 いふはらり

先 いふはらり
先 いふはらり

先 いふはらり
先 いふはらり

先 いふはらり
先 いふはらり

先 いふはらり
先 いふはらり

先 いふはらり
先 いふはらり

先 いふはらり
先 いふはらり

先 いふはらり
先 いふはらり

先 いふはらり
先 いふはらり

先 いふはらり
先 いふはらり

を我々の謙退の事と重んずる義はナキヨリ
れしけさの由狀却ると云ふ速懐の詞重んずる
内大臣の許容をねらふ非下宿初め其陳之
其高祖太后の其父呂云の高祖と云ふ其母の呂媼の
情せしと其怒り見女子の知不非トテ所わし高祖
書アセリ此故事云キる同云々の高祖と云ふ
許容をいふことなりと云ふ不承をいひ
おぼせ又は卷ノ奥ノ秋上天皇号アリ
人臣ノ号高祖遊歸しけ首尾を以テ今ハ
已上秘抄ノ内ニ云院自筆ニ有入

たふしのさしつゝおれり
美 儒臣のさしつゝおれり
儒臣のさしつゝおれり
かれり
高祖紀 高祖廿日一朝大云如家人父子礼云
朱別

家令疏本云曰天無二日土無二王今高祖雖子人主也云雖父
人臣也奈何令人主拜人臣如此則威重不行後高祖朝太云擁
篲迎門却行高祖大勢下扶太云曰帝人主也奈何以我乱
天下法就是高祖乃尊太云居太上皇心善家令言賜金五
百斤注蔡也曰不言帝非天子也索隱曰按本紀秦始皇追尊
莊襄王為太上皇已有故事矣蓋太上者無上也皇者德太
於帝故尊其父号太上皇也

已上秘抄ノ内ニ云院自筆ニ有入之け諸河海ニ云我之而云先
被注加け凡之間重載

いふらんちやま

由大臣のうらんちやまをなやましりふ地をうらふに
魚のちやま

由大臣の御也

いかに御しりしらすのこて御事まはらひ
私語抄より引寄

いってり 秘り音れ詞

昔とつりいふわりのことな

兼 在致仕大臣大い答上などのわりのことな

つふふとく

夕音詞をすててもは仕大臣よりふとく

いふわらんちやま

道分味をぬきぬきやまは保りてはり
心のをらうたりとこわたりと謝りて詞

宰ねさうのいとしりらあうりしーいりりあもりし

ゆあ勸益はた居る益を袖言不賜りて不居るゆ

益を指あうり核もらこしあし唯扱れ

天益を指りて居るよくあてね縁すこしは業をえ

くわねる外買のあ礼をあうりし

礼とーりりあ

私田府の外買又とれ乳をえけい舎んし

つるあかりし

いくりあけい春をらりし花のいりりああかん

徳宣集うーいりせしこばうすのいりりああかん

春に末つーいりりし

いくりあけい春をらりし花のいりりああかん

あまうりし花をらりし花のいりりああかん

いくりあけい春をらりし花のいりりああかん

いくりあけい春をらりし花のいりりああかん

たをわめの袖まらりあはれんかろんやあまをらりし

たをわめ 婦人 婦人 又 年 弱 女 人 婦 人 幼 婦 人 婦 人

先とせし升れ居るいりりし

夕音力す雲井の居る威えしとせしんとの愛接也

ついでんいりりし

巡流也すけいりし

ついでんいりりし 誦流也

ついでんいりりし 誦流也 私人用

あいのいりりしはりりし

各群中いりりしはりりし

いりりしはりりし

七日ついでんいりりし

月七日た魁

四月七日のいりりし見らりしついでんいりりし

いりりしはりりし

あきんや ちね

おしし中ねとさーの程り

あやとさ

ワ音は体息を周素とす

たさな

大信のさつと我とさーの程り

むしりたれい せれし

中ねのなれいさー中ねのワ音よりさ

あさたるさふんこ内大信のゆりさ

私たはれゆりさーさーさーの程り

公のあつたは中ねのふんさー

ねよりさるあつたはさーワ音

ささいさねねよりさるなれいさ

ありさーさーさーさー

あさたるさーさー

ゆーさーさーさーさー

りさささーさーさー

すねのさー

中ねのワ音さーさー

私ささ

中ねのさささー

人ささ

ねねのワ音のゆりさ

さささーさーさー

さささーさー

ワ音さささー

さささーさー

おさささ

さささー

さささーさー

さささーさー

さささーさー

又むちよわりのけりこのおれをなうしてたし流り
やとくくして(田舎)美(歌) 歌名にかたかなの音
の女れおやよこしけりしをうりおいとていふを
れ美のわりのことのはを女美のあまき花を
けることして又よる夕音又くくくおがよ
れわりのあまき花をよこりなりし流りとあふ流り

あれよつこらく

長あ流群れ余気よわうけて夕音のわりの

あつちよつこらわりの
あつちよつこらわりのわりのわりの

んこよこしよつこら

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

あつちよつこらわりのわりのわりの

とくはいふをいふこと

事くわあわい

内大臣とク音れお中のみと給一と臣のおやす

お子こそたれや

ザ御子こそたれと一臣のまうくおはせらと

何うかういふにぬし也

或抄お流にまうくしてさういふものやまをたれ

おまうくやうらうらうらとさういふ人一人おりまますや

おとこいふすまをさういふらうらうらと

かうもさあまらすおとこ白うあまらうらうらと

原氏おれとくもおと

おとこいふすまをさういふらうらうらと

西又たおと六月おと子孫の推とあはれらうらうらと

おとこいふすまをさういふらうらうらと

てんけいさうとていふこと

ク音十九ヤクク一おまう一子孫あまらうらうらと

親字原諸抄ニ子孫一はミクれらうらうらと

さういふらうらうらと

たまたま明公娘は原おとこら梅たしゆらうらうらと

らうらうらと

あつてうらわやうらうらと

ちうらうらや 花うらや

くわんがわい一とてうらや

國史云仁明永和七年正月八日請律傳灯大法師位

安於清涼殿始行灌佛事

私助事根原抄曰 灌佛 正月八日

おとこいふすまをさういふらうらうらと

おとこいふすまをさういふらうらうらと

御におくしあし作り地ありお互に札を釘共の
五冬の水を入るぬるまありありて屋上さや空居
乃布施とも多くまじりしるま付て風流打とわ
と衣箱入るて入て墨盤おりのおきりはあか
屋上の墨盤のうまよくまじりておのあまづ
とりりてお友のかけしれと打る自ら札を
はくお断の中布施の紙を打るを糸の人の布施
守師の信まのかりて信の作法とりりて
くまじて先古守師のりん仏をておまじり
膝ひつておまじりて水とぬて権仏にて
布施給てとりりてけし生念の推た天皇り
毘藍紙りしれぬいりて天孫下り水と
あまじりておまじりて
私云是の内裏への権仏の儀に親と大に
おがくうらへー但大種と見えりんた
か

おまじりておまじりておまじりて
再親と大に
布施と内裏への

布施たとおまじりておまじりて
おまじりておまじりて

権仏の儀に
親王錢五百文
大納言四百文
中納言三百文
奉議二百文

四位百五十文
五位百文
六位并量五十文

親王大納言五帖
大中納言三帖
四位五位二帖
六位并量一帖

推古天皇十三年
是年新善寺
三月八日設齋會
日本紀

私云昔ヨリ諸寺
行つ仏生念の推古天皇ヨリは
権佛とて内裏へ
親王大に家より
おまじりて
兼和元年

権仏の儀に
おまじりて
おまじりて
おまじりて

おまじりて
おまじりて
おまじりて
おまじりて

寧ろかいはんりくいしけりし

是より音れを井なるはりもすまのほ

とことなむとすはけらぬまはるん

ワ音りのつるしけりもめ音居のま

マ音れをいしけりしん

ワ音れをいしけりしん

私にわすれなむとすはけりしん

とらたしめりしん

年ころのつるしけりし

私に方より音れをいしけりし

とすわたりしおなりし

又原氏ゆらけりし

まむしりしん

いしけりし

ありしとて

ワ音れをいしけりし

或抄或云云
三言井居三言
けりしん
ワ音のいし
りしん
とこと
私にわすれ
不可用之

あかしおとしし

田舎れをワ音と音りて

とすわたりし

まけりし

私に又ゆらけりし

まめやつた

ワ音りのつるし

いしけりし

め音りのつるし

め音りのつるし

私に今とて

わのつるし

二条れをいし

女音のつるし

何のつるし

ワ音れため

私に今とて

二条れをいし

女音のつるし

何のつるし

こわれの人よ業上を憂ふ人なり

御山ごさん 津つ 横よこ 敷しき 地ぢ 見み の 事こと

あつしくの女をんな 席せき

あの河より流れくまなりいねねとわれはさくくと
あつしくの女と名の始末とをいつるん

おつしくの女と名の始末

津横敷のあつしくの女と名の始末

金おつしくの女と名の始末

おつしくの女と名の始末

車と名の始末

原田のたは人な瑞るま

おつしくの女と名の始末

おつしくの女と名の始末

おつしくの女と名の始末

おつしくの女と名の始末

おつしくの女と名の始末

おつしくの女と名の始末

おつしくの女と名の始末

おつしくの女と名の始末

おつしくの女と名の始末

けの河いさうのたうさなる私にほもけのいさ
あよ山皇も兼上とののたうさなる私にほも
つとてほぐれぬのまうさなる私にほも
ほりほりあはぬのまうさなる私にほも
あふかへりさうさなる私にほも
ぬのまうさなる私にほも

上をアをとおさうさなる私にほも
第上の機あり右はりのまうさなる私にほも
第上のまうさなる私にほも
まうさなる私にほも
賀茂祭飲明天皇沛世天下奉國風吹雨零令時初
ト勅侍者若子令ト乃賀茂神宗也撰官表且
繫鈴人家指影而駢馳以為祭祀
以中坊近衛使例并と侍使始可勅

賀茂祭春日祭の使近侍司を用らうさなる私にほも
あはれ人陪位いと出目入被なるまうさなる私にほも
立又還立まうさなる私にほも
賀茂祭八使のまうさなる私にほも
息才の代とまうさなる私にほも
かの大庭とまうさなる私にほも
柏木以中坊とまうさなる私にほも
上をアをとおさうさなる私にほも
な内侍のまうさなる私にほも
惟光とまうさなる私にほも

おひことし
惟光とまうさなる私にほも
宰おまうさなる私にほも
しとまうさなる私にほも
くやんとまうさなる私にほも

右内侍のてり音言升るまゝにまゐるす
何しねまのこゝろにみてもわづらひにありは
こゝろにみてもわづらひにありは
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
私ッ音れ事おね内侍と云ふ事ありと云
おろろろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

私ッ音れ事おね内侍と云ふ事ありと云
おろろろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
折桂ハ音のりとも章生ハ音のりとも
私ッ音れ事おね内侍と云ふ事ありと云
おろろろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
晋書曰郗詵字廣基奉賢良對策為天下第一為雍州
刺史武帝欲東堂會送問詵曰卿自如何詵對曰臣對策
為天下第一猶桂林一枝崑崙玉今以之課試及第之事作來

共花雜菅原大納言のりゝりもまゝにまゐるす
久々の月桂をあらゝり家内をもぬまゝに
もろせかゝりていゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
桂の葉風ハ博土ハいゝゝゝゝゝゝゝゝ
葉風 桂の葉ハ博土ハいゝゝゝゝゝゝ
もろせかゝりていゝゝゝゝゝゝゝゝ
もろせかゝりていゝゝゝゝゝゝゝゝ
私ッ音れ事おね内侍と云ふ事ありと云
おろろろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かくておろろろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
紫上ののりゝりゝりゝりゝりゝりゝり
紫上ののりゝりゝりゝりゝりゝりゝり
原のふはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かのあらうしを

明石の上也

原のうらうりのよん

うらうらいはあち

実上の公母は言母なれ姪素と実上と

のんも地

明石上

六のあらうし

あしれ姪素のあらうし

姪素は実上と母は言母なれ姪素と実上と

の母を言母とくは言母とくは言母と

おのわりより

実上の方より言母又明石上姪素との

のの

まういとおわり

姪素のおと

おられと

見らふは

自よん

私を

て

は実上

お

実上の

あ

明石上

い

あ

明石上の

あ

明石上

あ

あ

三日うしーてきふいままうてりよ

明石上のまうりのりあまきこうのついでに案の上石よれ水
たひんわりしーし

たひんわり

案上へ退おわりて明石うりのりあまき

あまのりん

案上明石よれ對面ありし 私に對面案上明石姫君あまき

かくおとらぬいぬよ

案上の詞

姫君のまうりて経り年月あまきいんあまきよれ隔ん

いありうとは案上の詞

私云姫君のついであまきは案やういんあまき明石の
年月へいこれをも案母がれいんあまきあまきあまき
ごうとのりようらあ

あまきうりあまきあまきをいんあまきあまき

けしの手姫君とも成人ありてはあまきあまきあまき

案と明石とのついであまきは案と母のいんあまき

あまきをいんあまきあまき

明石よれあまきあまきあまきあまき

あまきあまきあまき

明石よれあまきあまきあまきあまき

あまきあまきあまきあまきあまき

明石よれあまき 案上あまき

あまきあまきあまき

あまきあまきあまきあまきあまきあまき

あまきあまきあまき

あまきあまきあまき

明石よれあまき

たよるなまうし

明石姫君のあかり

かきくぬことさかき

明石上のいりけい

たうこのいせおかし

原の姫君たちよ

かきくぬことさかき

明石姫君の

えしうらま

春ま

いとこのいりけい

明石姫君のあかり

あはれ

明石上のいりけい

きこまね

いとこのいりけい

桃所

よはよはといりけい

うらま

業上

おたしといりけい

業上と明石上のいりけい

さうといりけい

おつう人と明石上をうらま

私は明石上をうらま

おつうもたらうらま

原のいりけい

おつうといりけい

明石女御といりけい

おつうといりけい

おつうといりけい

おつうといりけい

おつうといりけい

とわかれしとやうんと

原氏大臣官ヲ休て原氏をこもとの中へ成る
漸テ身退し心

たのうたあはれ

原氏隠居しおふたもしつりん、業上中子をたけは
いとととれと秋好才おふたもしつりん、業上中子をたけは
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、

よのホコレ 花散雲

あはれは原氏しつりん、業上中子をたけは
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、

あはれとつりん、業上中子をたけは

原氏のおと明年に十歳打ぬ因襲令
おふたもしつりん、業上中子をたけは
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、

執政人四十賀例 （西の大政） 貞観七年四十歳

古今かりこのおふたもしつりん、業上中子をたけは

ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、

あはれは原氏しつりん、業上中子をたけは
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、

長世天皇天下皆謚也位よつりん、業上中子をたけは
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、
ことと明石の姫君こそしと界の業の中へおふたもしつりん、
但太上天皇と号をぬいりつりん、業上中子をたけは
太上天皇と号をぬいりつりん、業上中子をたけは
女流たりは六条院のちりつりん、業上中子をたけは

いりて御封くつはとすする
私に封するの事記さるるに海あやまらぬ

かりて世の志を

源氏は弱くても執政の人たりぬ

いりしをわたりたりんども

あつたての詞は改不改てこのあつたは源氏は同族

たはたれもこれ改て治すたも神をいふる天祚

れたと天皇は首の例をわたりたあつて治すた

いりての字は濁る事(源氏にた改たは御封する事)

いりてと院中れ作はの事とすは信は後

まも厳密なる事をいり

いりての事いりての事いりての事

御事れ後式は唯す入りて

かしてはれあつての事いりて

みもと冷泉の志はねをいりて源の志とす

いりての事いりての事いりての事

内大臣あつての事

内大臣にりて改たはあつての事

内大臣の志はねをいりて源の志とす

宰相中ねの事

夕音中納言は成りて

いりての事

いりての事いりての事いりての事

みらのりといふわらうといふぬまの海をいふか
造道のうへに布單に錦をうつくしむるをいふ
せよやといふ

軟岸也給をうつくしむる布をいふのやうに物

三つ一おのうつくしのおよ

三つ一おのうつくしのおよとつらさともおのうつくしをいふ

物いかり

神厨子所別當一人預膳所龍舟一人持劍四人細

代おし類 職員令云雜供云云おんまきくノニかりとんし

物事

先代旧事本紀曰秋神邊餐之時禱日而擇全神化物入

河屋昨出座填

矣

回云云東流しものこし厨子おれ物いかりのいかりの内裏

あつたや一節の厨子おれの上のお脈とつらさともお

まのうつくしをいふ物いかり

ちいさなるともいふ

天保四年五月十二日申越之釣殿る漁者丹波春助下納捕
魚得三唯鯉鯉即放入夜還神

應和九年三月廿日之釣殿覽曳細又令佐丹

を

神記延和八年五月廿八日送神泉苑西振門入所埒殿大巨

作合捕池莫右末門皆清經朝臣持可捕得魚奉覽則神

前料理供膳餘給侍臣

石末門先氣茂洞の脈
厨子所一人階下調給臣下

以時騎

射小三度

同十八年二月廿日入神泉苑東門至馬埒下與計問た

細捕池魚付の厨子所調供又南屏下調給侍臣亦乃百

一社競馬

同年十月八日幸朱在院為院造作の御馬也在院舊友原

朝臣請捕魚依請た末門官人奉門令早細糸入祀細

前池得鯉數十餘喉於神を調供又お東御下調給侍臣

しよとのおらんとはけきと

了場後よりらん原よりわらうしすたの興なり

うらひたよとせれしとこ 王子の代り

山姥のしらべに傳へしむらさきとてうらぶらぶのおもひ
にのにおまへ秋好中一夏のぬく

私りおおなり一技をまじく木ノ葉成るる西を秋
のりめなりおまへけちをりく一秋の秋好中一夏のぬく
はりふくも西の町を忘るる

中ねらうのぶ
秋好中一夏のぬく
御座二也

朱雀院と六葉院と也
すま上冬泉院朱雀との中産なり源氏乃中産は
さけてまじけられさる私云はまじ也秘の義者

せんトあわりてなをまじのよか
みり冷泉宣旨ありて源氏の中産と朱雀の法をまじ
るるの秘の義者なり源氏乃中産はまじなり
みり冷泉宣旨ありて源氏の中産と朱雀の法をまじ
るるの秘の義者なり源氏乃中産はまじなり

朝觀行幸の作法もわりと記とす
私りやいさひ恭字の心

他のいそぐのりおと
他のいそぐする例もわりと記とす

同作作法もわりと記とす
あつちいさひ一巻先は定むる法なり奏者も記とす
もわりと記とす
にりてけしけしと記とす
捕ら養階下なり

近世廿年十月十八日權中納言藤原朝臣若小島於菊枝
左階前奏し船木氏有進御
鷹飼事
康保六年七月廿日藏人延光朝臣以馬助滿仲右近
府生多云高右近番長播磨貞任木並為清鷹飼
職負令云主鷹飼正一人常訓習鷹飼犬又

許彦同為人所被宿や仍為人右佐養しん
供許執し時一座人可賜膳ア之由作し

私云右のをけといふは別右近のりゆん

おひさおとわおせすなまぬくといふはおのよまの

殺はお國作すけく御膳は調さるる也

おののお膳はさるる也 例あり

以口女魚不庭御 日本紀

みこころんいふはあけさるるにゆり

王御取献地よりいふや折櫃築地をさるるに

さるるに

がくもの人等 衆百人に地下の伶人

さるるのた衆はあわて

さるるに

朱藤元のりみられ

原氏と殺はお國をばはさるるに

賀王恩といふ也

賀王恩 或抄おはるる王の恩と執しるるに
内のみと水がぬすい

みこと冷泉也 お國の息衆をさるるに

おのいふさるるに

子息頼勅祿し時又兼踏定儀也

あらしお流すくをわくとおくをばはさるるに

あらしの流は原氏之福く朱藤元のりみられ

しは原氏をたれにさるるに

あらしの流は原氏之福く朱藤元のりみられ

あらしの流は原氏之福く

あらしの流は原氏之福く朱藤元のりみられ

あらしの流は原氏之福く

あらしの流は原氏之福く

お國のなりはおりのりみられ

あらしの流は原氏之福く

お國のなりはおりのりみられ

お國のなりはおりのりみられ



